2026_0113「寒中に咲く紅梅 ― 鳥がつなぐ春の兆し」日々の理科 4174 号

お茶の水女子大学　サイエンス＆エデュケーション研究所　田中　千尋

・

職場の構内に続くイチョウ並木で、本日撮影した紅梅の一枝です。一年で最も寒さの厳しい一月中旬、朝には氷点下になることも珍しくない時期ですが、葉をすべて落とした木々の間で、紅梅だけがいち早く春の気配を告げるように花を開いています。濃い桃色の花弁と、中心から放射状に伸びる黄色い雄しべは、冬枯れの景色の中でひときわ目を引きます。

この時期、周囲にはほとんど花がなく、昆虫の活動も極めて限定的です。それでもこの紅梅は毎年欠かさず実を結びます。そこから想像されるのが、冬でも活動できる「鳥による送粉」です。梅の花は、低温でも分泌される甘い蜜を目当てに訪れる鳥、とくにメジロやヒヨドリを主要な送粉者としてきました。鳥が花の奥にくちばしや顔を差し込むと、雄しべの花粉が顔や喉に付着し、そのまま次の花へ運ばれます。ときにヒヨドリの顔が黄色く染まって見えることがありますが、それは大量の花粉を付けた証拠であり、多少花を荒らしながらも確実に受粉を成立させる重要な役割を担っています。

寒さの中で咲き、鳥に花粉を託して次の季節へ命をつなぐ紅梅。その姿は、まだ春には遠い冬の構内に、静かで確かな生命の循環を感じさせてくれます。

2026 年 1 月中旬
お茶の水女子大学構内